

令和4年度第2回野洲市社会教育委員会会議（概要報告）

会議日時	令和4年9月30日（金曜日） 13時30分～15時30分
会議場所	野洲市役所本館2階 庁議室
出席者	社会教育委員 出席：中出委員、光永委員、駒井委員、福森委員、木村委員、鷺田委員、西川委員、高木委員、小澤委員 事務局：西村教育長、馬野教育部長、北脇教育部次長 (生涯学習スポーツ課) 井狩課長、菱沼参事、岡山
傍聴人	なし

【教育長あいさつ】

本来、子どもを一番守らなければならない担任が子どもに対していじめ行為をするという事態が当市で発生したことについて、深くお詫びする。教育を監督する立場にあるものとして反省している。各校園、学校の先生方と共に教育への信頼、市民の信頼回復にも努めていきたい。今回発生した事態を受けて、ベテラン層への支援体制を図るとともに、個人の思いを共有化してみんなのものとして支えていきたい。チーム学校として捉えていけるかという所が、これからの大きな課題と思っている。

担任の先生が一人で、クラス30数人の子ども達を見て指導するというのはやはり良くないと思う。今後、コミュニティスクールを立ち上げて学校が地域の皆さんと一緒に子ども達を共に育てて行くという視点を作り上げることが一番だと思っている。

社会教育委員の皆さんにも、これから色んな部分で学校教育の支援をしていただきたくお願い申しあげる。

議事

(1) 委員長、副委員長の選出について

委員長に高木和久委員が、副委員長には駒井朔男委員がそれぞれ就任

(2) 令和4年度野洲市の教育について

→別添資料の通り

(3) 社会教育委員のあり方について

→高木委員長より説明

時代と社会の変化とともに、青年団や子ども会、自治会への加入率が下がってきている一方で、テーマコミュニティというものが増えてきている。テーマコミュニティと地域コミュニティをうまくかみ合わせながらやっていく必要がある。学校のコミュニティにおいても同様である。

社会教育委員として大事なのは、自分で調査研究を行うことである。全部が全部やる必要はなく、自分の分野で構わない。

次の世代を育成していくために、社会教育委員として一つの役割を持って提案していく活動が、社会教育委員活動である。それが必ずしも全てがヒットするわけではない、また教育委員会の中で精査されて、必要な事を一緒にやろう、これはちょっと難しいと判断する場面も出て来るかもしれないが、これからの野洲のために自分が何ができるかという事を問い続けたい。

学校との連携も視野に入れて、つながりやネットワークをつくり、次の世代を活かしていってほしい。

家庭教育についても、一つの視点を持ってやっていかないといけない。教育委員会サイドも、家庭教育に触れられていなかった部分があると思う。そこに福祉の視点が出てくることも考えながら、我々自身が連携し繋がっていくのも一つだと思う。

学校支援・協働する地域社会を作るために、人材発掘のアイデアや家庭教育支援の学習機会の充実に向けて考えることも、社会教育委員として大事な視点である。

〈意見等〉

- 自分の地域を小学生がどう思っていて、中学校へ行った時にどう変わるのか、変わるのなぜかということを考えることが、今後、野洲市の地域コミュニティを作っていく上においての一つの視点ではないだろうか。
- 各種団体中でも、高齢化や若い世代が入ってこないことが問題となっている。子どもが所属している吹奏楽部で、多世代交流事業として地域の高齢者施設に出向いて演奏するなど、地域・学校・教育委員会がうまくかかわっている例がある。
- 中学校のお兄ちゃん・お姉ちゃんが小学校の児童の面倒を見てあげたりする形で交流したり、地域独自でやっている「生き物観察会」などの活動を通じて、地域が子どもを育てるという視点は大切なものであると思う。
- 地域住民として、地域学校協働活動を通じて学校とつながりができることは非常にありがたいと思う。
- 生涯学習カレッジの一環として、商売を通じて図書館でフラワーアレンジメント体験のイベントを開催した。違った図書館の利用機会があり、つながりが持てたことは有意義である。
- 中学校でフラワーアレンジメント教室を行っており、一業者として子どもたちが自分の将来について考えるきっかけになれば有難い。困難な課題を抱える家庭・子どもを支える支援として「一緒にどうですか」と言えるような状況になればいいと思う。
- 学校が見る子ども達の姿と地域の人が見る子ども達の姿、同じ子どもだが見方とか見え方が違う。情報交換しながら、学校で足りない部分を地域の活動の中で支援し、逆に地域の方で、もうすこし力を付けた方がいいこともある。コミュニティスクール準備委員として、そういう話をコミュニティスクールでしていこうと準備している。
- 子どもが読書をしないとよく耳にする。仕事が忙しくて親が連れて行けないことも影響している。研修に行った芦屋市では、「バックの中に本を1冊」を合言葉に、大人から本に親しめるような環境を作っている。子どもは親を見て育つというが、子どもと一緒に本に親しむ体験ができればよいと思う。
- 社会福祉協議会は、誰もが安心して暮らせる地域づくりをすることが根本的な活動になっている。「ふくし」とは、「普段の暮らしの幸せ」の頭文字を取って“ふくし”というふうに言っている。そういうまちづくりをする中では、子ども達が安心して帰っていく家庭が安定している事が一番である。
- 昔は三世代同居で、両親に怒られても、そのおじいちゃんおばあちゃんが子ども達の想いを受け止めてくれる逃げ場があった。今はそうではなく、核家庭であったり、一緒に暮らしていて

も、親と子だけの空間で過ごしていて、そうする中で子どもがゆっくりとできる場が無くなってきたことは残念だ。

- 学童では、子ども達の中で緊張してる時間が多い子が増えているように感じている。家族構成を変えることはできないので、家族では担えないところを地域で支えて行けたらいいと思う。
- 去年、中主中学校の1年生と一緒に自分達の地域について語る時間をとってもらった。多くの生徒が地域愛を持っていることがわかった。共同募金のような募金活動であったり、部活動でランニングなどをしているときに地域のゴミ拾いができるのではないかなど、1人でやるのは難しくても、皆でやったらできるんじゃないかという声を聞かせてもらった。
- 小学校・中学校に社協の職員が出向いて、意見を聞かせてもらって、こんな街をつくりたいという声を地域の自治会長さんや民生委員さんに返して、皆で共にまちづくりができたらいいと思う。
- 地域の中にはいろんなユニークな人がいて、色んな力を持つてる人がいる。学校の教師の狭い世界だけではなく、子どもにとって学校で生活してる時間と言うのは、本当に学校にいるときだけで、それ以外は地域で生活してる。そこをもっと社会教育の面から見ていく、そういうことができる地域の人などと繋がって行く事が重要であり、社会教育の大事さを感じた。
- 学校教育というのは、学習指導要領が決まっているから、決められたことをやるのが中心、社会教育というのは、その中でバリエーションを考えて行くという事ができるので、そういうところでどんどん人材を育成することができる。
- 全国のいろんな勉強会や県の研修などに参加し、自分たちの今の取り組みが本当にこれでいいのか、行き詰ったことが沢山あるのではないか、そういう生涯学習、社会教育の取り組みを見ながら、私たちも何ができるのかという事を考え、野洲の地域、地域性に合った取り組みをして行く事が大事である。

(4) その他連絡事項

- ・令和4年度滋賀県社会教育委員連絡協議会について
野洲市からは高木委員長が理事
県連絡協議会の会長が野洲市の川端一氏であることを説明
- ・令和4年度近畿地区社会教育研究大会奈良大会の結果について
近畿地区全域の社会教育委員、述べ700人余りが参集
講演会と分科会に参加
- ・令和5年度近畿地区社会教育研究大会について
- ・令和5年度社会教育委員先進事例見学研修の検討について